

2005

親子で学ぶ平和学習資料

第27集

私の戦争体験



ピカドンは怖い ノーモア・ヒロシマ

東大阪市 宮野 麗子 (74歳)

夫、理(おさむ)は平成15年5月76歳で亡くなりました。生前、夫は被爆(※①)体験をほとんど誰にも話してませんでした。妻の私には結婚前に手紙を通して、自分が被爆者であることや、生い立ちのことを綴(つづ)ってくれました。その中から夫の原爆への思い、被爆体験のことを二、三記したいと思います。

夫は昭和20年(18歳)広島高等師範学校(※②)の学生でしたが学徒動員(※③)で、工場に出動する毎日でした。8月6日は非番で、学生寮にいた夫は、ピカッの閃光(せんこう)で何が起きたのか分からないまま友人のいる工場へと急ぎました。

爆心地(※④)へ近づくにつれ、黒い破けた着物、赤黒い足らしきもの、人間とは思えない物体がヨロヨロ倒れてはうずくまり、水を求めるかすかな声に、その辺りの壊れた水道管から吹き出ている水を飲ませると、2、3秒で息が絶えたそうです。工場へ行くほど、うずくまった黒い物体が多くなってきました。友人を捜したが、捜しようがなかったとのこと。元気な人は救援活動員として被爆地を駆け巡ることになり、その間の放射線(ほうしゃせん)が夫の体を汚染(おせん)したと思われる。1ヵ月後には毛髪(もうはつ)が抜け、歯茎(はぐき)からの出血は止まらず、激しい下痢(げり)症状も続いたそうです。第二次被爆なのです。

かつて健康優良児(けんこうゆうりょうじ)として表彰された立派な体も、食糧事情も悪い上に救援活動の激しさで衰弱(すいじやく)し、学校も焼けて休校となったので、東大阪の長瀬(ながせ)に帰ることになりました。

実家では、息子が原爆の日から1ヵ月余りも音信不通(おんしんふつう)なので、死んだのでは

※①被爆

原爆による攻撃を受けること。1945年の原爆投下より、その年12月末までの約5ヵ月間に、広島では約14万人、長崎では約7万人が命を奪われた。

※②高等師範学校

師範学校、中学校男子、高等女学校の男子教員を養成した旧制の官立学校。

※③学徒動員

1943(昭和18)年、それまで兵役を免除されていた大学・高等学校・専門学校(せんもんがっこう)の学生たちも戦場や工場に狩り出されることになった。

※④爆心地

原子爆弾が落とされた中心点。爆心地から半径2(ざん)マイル以内の範囲。

ないかと仮のお葬式を出そうと思っていた矢先でした。やせ衰えて髪は抜け、服はボロボロ、顔はどす黒く、その姿は一瞬亡霊ではないかと両親は思ったそうです。でもその時の両親の喜びはたえようもなかったそうです。

——軍人氣質に凝り固まっていた私の気持ちの中にポツカリ大きな穴が入って、自然にその穴の中に落ち込んで何をすることも物ぐさになっていった。あまりにも信ずるものの他愛なさに啞然とし、それから若人の生活に大きな疑問懷疑を投げかけた——夫の手紙の一節です。原爆によって受けた傷は、身も心も、人の一生の方向さえも変えるものなのです。

夫の骨上げの折、頸椎から尾骶骨に至る背骨の骨の中に、2寸くらいの赤黒い斑点がぎっしりと詰まっていました。不思議に思って聞いてみると「ガンの組織は全部灰になりますが、これは分かりません」と係りの人の言葉でした。

原爆の影響かは不明ですが、夫の体内の骨にこのような物質が火葬後も残っていたとは、とても恐ろしく思います。戦争という大きな欲望のため、人間の理性が暗くなり、原子爆弾で大量殺人をしてはならないことが、わからなくなってしまうことは本当に悲しい限りです。

今回夫の被爆体験を記すにあたって、より一層命の大切さを痛感いたしました。

兄たちの戦場

和泉市 藤野 シゲノ（81歳）

私は大正12年生まれの81歳です。この年になりますと、思い出すのはやはり親兄弟のことです。私には3人の兄と弟が一人おりました。専業農家（※①）だった母は、父を交通事故で亡くし、頼りにしていた兄たちの入隊で、大変苦

※①専業農家
自家の農業収入だけで生計を立てている農家。

労が多かったと思います。

昭和13年頃長兄が入隊。昭和16年には次兄も入隊しました。その頃の軍隊は、お国のためなら命も惜しくない時代でしたので、職業軍人(※②)にでもなる意気込みで張り切っていました。

昭和19年頃には戦争も益々厳しくなり、すぐ上の兄も海軍兵として入隊し、長兄も一度は帰っていましたが、再度召集(※③)され出征(※④)しました。派遣先は中国の北支(※⑤)でした。

昭和20年頃次兄も北支へ行っており、体調を崩して困っていたそうです。でも戦争の真つ最中のこととて、休むわけにもいかず戦いに参加していました。健康な兵隊さんたちは次々前進していきました。ただ一人残された次兄は中国人民家で休んでいたそうです。そして、銃を杖に麓の方へ降りてきたときのことです。麓の道路を数台のトラックが兵隊たちを乗せて通り過ぎていきました。一番最後の車が、とぼとぼ下りて来る兵隊(次兄)を見つけました。「あれは日本兵らしい。助けてやろう。車を止めてくれ」と言って、兵隊を助けあげました。それは班長を務めていた長兄の車でした。班長だったので車を止めることができたのです。長兄はある地点へ移動の途中だったそうです。助けあげた兄は、それが弟であることに驚きました。弟は手足はむくみ、熱も高くひどい状態だったそうです。長兄は早速弟を野戦病院(※⑥)へ送りました。

「本当にこんなことがあるとは、神のお引き合わせか、奇跡としか思えない。あの時気づかず通り過ぎていたら、取り返しのないことになっていた」としみじみ語っていました。

その後、長兄はニューギニアへ移されました。戦争は益々ひどくなるばかり。昼夜水につかり、顔だけを出して陸に上ることもできなかったそうで、力尽きて亡くなった兵隊さんもいたそうです。日本へ帰ってきたのは終戦から10ヵ月も後のことでした。その後もマラリアにかかり、全快するまで大分時間がかか

※②職業軍人
本人の意思で、職業として軍務についている軍人。

※③召集
明治以来、日本の男子はすべて兵役の義務が課され、20歳で「徴兵適齢」となり「徴兵検査」を受けなければならなかった。そして召集令状(通称「赤紙」)が届いたら、いやおうなく軍務に服さなければならなかった。ちなみに、工場などへの「徴用」の令状は白い紙に印刷されていた。

※④出征
軍隊の一員として戦地に行くこと。

※⑤北支
中国北部のことを当時の日本ではこのように称していた。(今日の行政区分では、北京・天津両市、河北・山西両省と内モンゴル自治区)。

※⑥野戦病院
戦場の後方に設け、戦線の傷病兵を収容・治療する病院。

りました。

兄たちは、皆無事に帰還したものの、戦争での無理がたたったのか、長兄は44歳、次兄は42歳で昭和34年に相次いで亡くなりました。

直接の戦死ではありませんが、戦争によって病を得て体調を崩し、若くして亡くなったこと、これも一つの戦死ではないかと考えております。

私の太平洋戦争

堺市 川井 幸 (81歳)

昭和16年12月8日、真珠湾攻撃(※①)から始まった太平洋戦争(※②)は、初めこそ勢いよく進みましたが、戦いが太平洋全体に広がった昭和18年には何もかもが不足となりました。

昭和19年関東に初空襲があり、11月29日、B29の東京夜間の大空襲で焼野原になりました。関西でも小型機が飛来し機銃(※③)を射ち、屋根の上をカラカラと弾の転がる音がしました。祖父が、飛行機の弾などは「二階から目薬」と言っていました。以来言えなくなりました。

この頃には弟と下の妹の学校も工場となり、火薬を詰める作業や、男子は軍事教練(※④)に小学校に泊り込みで行ったりしました。私も習いごとに通うような時勢でなくなり、区役所へ勤めに行くことになりました。

昭和20年3月13日は大阪空襲の日。その夜、京都伏見の私の家から見た南の空は真っ赤でした。B29の編隊が次々通り過ぎ、大阪へ向かいました。当時私は、夫と婚約したばかり。彼は南方(※⑤)戦線からの負傷兵を収容する病院を造るため信貴山に横穴を掘るとかで、そのあたりの小学校に兵隊さんと泊り込んでいました。主人の家は天王寺なのでとても心配でした。翌日父は、彼の

※①真珠湾攻撃

1941(昭和16)年12月8日、日本海軍の機動部隊がハワイ・オアフ島南岸(真珠湾)に集結していた米国海軍太平洋艦隊を奇襲攻撃した事件。これによって太平洋戦争が始まった。

※②太平洋戦争

第二次世界大戦のうち、主として東南アジア・太平洋方面での日本と米国・英国・オランダ・中国などの連合国軍との戦争。

※③機銃

機関銃の略。引き金を引き続けると自動的に連続的に弾丸が装填・発射される銃。軽機関銃と重機関銃がある。マシン・ガン。

※④軍事教練

1925(大正14)年より中等程度以上の男子学校に陸軍現役将校を配置して行なった、軍に関する訓練。

※⑤南方

太平洋戦争の戦場のうち、インドネシア・ニューギニア・中部太平洋などの地域を総称した呼び方。

家と大阪の得意先を見舞いに行くとは出かけましたが、京阪電車は途中で止まり、まだあちこち燃えて近付けず引き返してきました。南の空はこの後3、4日真赤に染まっていました。何日かして、夫の家も全焼。工場を経営していたので買ったためた燃料の石炭やコークス(※⑥)が燃えて焼跡へ近づくこともできず、三階建ての大きな家だったそうですが、一度も見ることなく焼けてしまいました。ただ、家族皆さんが無事だったことが幸いでした。

昭和20年5月。主人の父上が、長男の結婚式を挙げたいとのことで、私は軍服と軍刀だけが財産となった夫と結婚しました。8月敗戦となり、2人大阪で生活を始めました。

これからの何年かは日本中配給制(※⑦)で、隣組(※⑧)の人数分の魚や野菜を当番が計って分けて各家へ配りました。お米代わりに砂糖が配給されたり、大きな材木が燃料として来たときは、みんなで運んで切ったりしました。お父さんたちが戦場から復員(※⑨)され子どもが次々と生まれ、人々は道路に掘った防空壕を壊して、トマトやキュウリなどを植えたりもしました。貧しくとも燈火管制(※⑩)や、戦いのないにぎやかな生活でした。そして、皆のがんばりで日本も立派に復興しました。

もう二度と戦争はできませんし、この次に大きな戦いをすれば地球に住めなくなるでしょう。

9歳の戦争体験

羽曳野市

田原弘子(69歳)

ゴーツゴーツ異様な爆音、何百機ものB29が空を真っ黒に埋め雨霞のように焼夷弾(※①)をばら撒く、町は次々と炎に包まれた。昭和20年3月13～14日

※⑥ コークス

石炭を高温で乾留し、揮発分を除いた灰黒色、金属製光沢のある多孔質の個体。点火しにくいのが、火をつければ無煙燃焼し、火力が強い。

※⑦ 配給制

割り当て制のこと。1939(昭和14)年に主食の米が割り当て制になり、続いて木炭、マッチ、味噌、醤油と広がり、4～5年後には配給でないものはなくなつた。

※⑧ 隣組

太平洋戦争中、国民の監視・統制のために作られた地域組織。町内会・部落会のもとに数軒を単位として作られ、動員、供出、配給などの日常活動を担った。

※⑨ 復員

戦時の体制にある軍隊を平時の体制に戻し、兵員の召集を解くこと。この場合は、召集・派兵されていた兵士が戦地や占領地から戻ってくることを。

※⑩ 灯火管制

夜間、敵機の来襲に備え、減光・遮光・消灯をすること。

※① 焼夷弾

火災や高熱によって人や建造物などを殺傷・破壊する爆弾・砲弾。

大阪大空襲^{だいこうしゅう}のとき、父は戦地、私は9歳、母と弟5歳、妹3歳の4人だった。

港区市岡で「粟^{あわ}おこし」店を経営。だが当時材料がなく開店休業。とにかく物不足、金属類はみな供出^{きゅうしゅつ}（※②）した。登校しても勉強どころか警報のたびに帰宅。昭和19年戦局は激しくなり、夏頃には学童疎開^{がくどうそかい}（※③）が始まる。

石橋に縁故疎開^{えんこそかい}（※④）した。右も左も田島^{たはた}、広い道が一本遠くまで続いていたのが印象に残る。学校では「大阪の子」とからかわれ、遠縁のおばさんには、9歳では荷が重い家事労働^{かじろうどう}をさせられた。また、トイレは屋外で夜は土間に置いた肥桶^{こえたけ}（※⑤）に。イヤだった。学校帰りには機銃掃射^{きじゅうそうしや}（※⑥）に狙われ、農具小屋に駆け込んだ。動く物（人）を見るとかなり下へ降りてくる、死ぬと思った。淋しく心細く、無性^{むしょう}に母に会いたくて気が付いたら石橋駅にいた。「大阪へはどれに乗るの？」と聞き、やつとの思いで家にたどり着いた。母は「長い道のり一人でよく帰ったね。死ぬときは一緒がいい」と言った。

その年も暮れ頃には空襲の回数も増え、決まって宵^{よい}、夜中、明方と、その度^{たび}に外の防空壕^{ぼうくうこう}（※⑦）に入る（家の壕では情報が入らない）。私はいち早く飛び出し場所を確保、ぐずぐずしていると入れない。寒い日には壕の蓋^{ふた}は凍りついて開かない。食糧不足でシャブシャブのお粥、具のない雑炊にお鍋を持って長蛇^{ちやうだ}の列^{れつ}だ（当時飲食店が配給所^{はいきゅうしょ}（※⑧））。そして運命の日、昭和20年3月14日未明、壕の中で爆音と焼夷弾のヒューッといういやな音を聞く。警防団^{けいぼうだん}（※⑨）の人たちが「中にいると蒸し焼きになるぞ」と触^ふれ、慌^{あわ}てて4、5百^{ひゃく}人離れたお寺まで、母は妹を背に私は弟の手を引張り必死で走った。焼夷弾は容赦^{ようしや}なく落ちる。小高い寺の境内から炎に包まれた町がよく見えた。皆呆然^{ぼうぜん}と立つ。何時間経ったか、夜明けと共にザーッと雨が降る。よく言う「大火に雨」だ。家が焼けた私たちは、例の石橋に行くしかなかった。まだ燻^{くすぶ}る家々、電柱が焼^やけ爛^{ただ}れ、防空壕の入口で折り重なって人が死んでいる、馬が狂乱状態^{きやうらんじょうたい}で暴れている（当時は荷馬車が多かった）。阪急電車は動いていた。猛火^{もうか}の町をくぐり抜け

※②供出

日本軍の敗退が度重なるようになって、国内産業は資材不足に苦しみ、1942（昭和17）年、政府は「金属回收令」を出して飛行機、軍艦などの建造資材を確保しようとし、貴金属その他、さまざまな物も回収した。

※③学童疎開

1944（昭和19）年、政府は米軍の空襲にそなえて「学童疎開方針」を決定、国民学校の3、6年生を都市から地方に分散させることにした。

※④縁故疎開

血縁・姻戚などの縁つづきや知人・友人などのつてをたよりに疎開すること。

※⑤肥桶

肥料にする糞尿（ふんによう）を運ぶ桶。

※⑥機銃掃射

戦闘機に搭載した機関銃から、目標をなぎ倒すように高角度に発射すること。

※⑦防空壕

空襲の際に避難するため、掘って作った穴や建造物。

※⑧配給所

政府が統制している物資を配る所。

※⑨警防団

空襲に備えるため、消防組と防空を担当する防護団とを結合した団体。

て顔は真黒、目は真赤、石橋駅で救護班きゅうごはんの人が顔をふき目薬を入れてくれた。神戸、四国と親戚を頼り、やっと徳島県鴨島かもしまに落ちついたが、ここも大変だ。学校からよもぎヨギ、桑くわの木皮もくひ―ヨギの強制供出きようせいきゅうしゅつ（※⑩）を言われた。級友とその家族に助けられ何とかできた。徳島市にも大空襲、家の窓から焼夷弾の雨、真赤な空が見える。学校は避難所になり、その姿は目を覆おわった。火傷やけどの薬もなく傷口は暑さでウジが湧わいた。私たちはどうすることもできず、ただ食物を運び、慰めの言葉をかけた。間もなく終戦。

今、物が溢あふれ何不自由なく暮らせる幸せを、若い世代の人は感謝すべき、またあの苦しい時代を経て今があることを!!

戦争にまつわる思い出

堺市 中村 禮子なかもら れいこ（69歳）

忘れもしない。それは昭和20年8月15日のあの日。「しばらく外で遊んでおいで」。いつになく厳しい母の声に2歳下の妹を連れて玄関を出た。じりじりと照りつける太陽の下で遊ぶ気になれず、玄関前の石畳にろう石（※①）で絵を描いて時を過ごした。どれくらい経たったか記憶にないが、母の様子が気になり家に戻った。ラジオの前で母と祖母が涙していた。一瞬立ちすくんだ。「どうしたん?」と尋ねたが2人とも無言。そうこうしている間に父が肩を落として工場から帰宅したが、やはり無言だ。「ねえ、何があったん?」と質問をくり返すと、低い声で「戦争終わった」。父の一言に「勝った! 日本勝ったんや」と私は大はしゃぎした。だが、どうも3人の表情が変だ。「そしたら仲直りしたんか? もう、空襲も警戒警報けいかいけいほうもない!」と叫んだ。『日本はきつと勝つ! 神風が吹くから勝つ! 英米鬼畜えいまいきちく（※②）、神風が鬼の敵をやつつける!』

※⑩強制供出
有無を言わず供出させること。

※①ろう石
チヨークのようなもの。昔は地面に絵を描いたり「けんぱ」で遊んだりするときに使ったもの。

※②英米鬼畜
「鬼畜」とは「残酷な行いをする者」「恩義を知らない者」。敵国である米国や英国を指して「鬼畜米英」とも言う。

と教え込まれていた。「敵の兵隊さんはみんな鬼？」とたびたび尋ねた私に、両親はいつも同じ言葉。「見たことないけれど鬼なんだろう」「鬼やから私たちの大事な学校焼いたんや」と米兵を憎んだ。

学校が焼けたその夜、父は当直、母は国防婦人（※③）として消火活動に動員された。私は防空壕から妹と祖母を連れ出して、一晩中原っぱをさまよい歩いた。その最中に頭上高くに落とされた焼夷弾が風に流れてすぐ先の百舌鳥国民学校（※④）を直撃。まるで花火のように空に舞い、それが落ちて学校が炎上した。その情景が、今も私の脳裏に焼きついて離れずトラウマとなっており、この年齢になっても花火は大嫌いだ。

私たち家族は戦争による直接の被害は受けず、また明日の食べ物もないというひもじさは経験しなかったが、父は折にふれて戦争のために無惨に多くの人々の尊い生命が奪われ、どれほどの苦しみと痛みが伴うか、また人が人を殺してよいはずはない。戦争は人を狂わせると、切々と話してくれた。

わずか8歳で終戦を迎えた私は、死に直面するような恐怖も体験こそしなかったが、それでも毎朝軍歌を歌い、教育勅語（※⑤）を唱え、B29の爆音を聴き分ける聴音試験があった。また、英語はご法度。「例えばサーチライトは探照灯というのだよ。決して家以外で英語は話さないこと」と、厳しく真剣に話す父の表情が今も忘れられない。私は戦後急変する学習内容に、子どもなりに戸惑いを覚えた。そして成長するにつれて、教育で洗脳されると真実が見えなくなり、歪んだ教育方針を信じ込むことの恐ろしさを感じ知らされた。社会人になって幼児教育に携り、48年間『教育に課せられた責務の重大さと再び戦争で尊い生命を落としてはならない』と強く思い続けて今に至っている。

※③国防婦人

1932（昭和7）年、大阪の主婦たちによって発足した女性団体。陸軍の支援のもとに女性の戦争協力機関として活動。1942（昭和17）年、大日本婦人会へ統合。正式名称は大日本国防婦人会。

※④国民学校

1941（昭和16）年、それまでの「小学校」が「国民学校」に改められた。子どもは個人の子どもではなく、国家の子どもとみなされ、戦争に動員するための教育が徹底して行なわれた。

※⑤教育勅語

明治天皇の名で国民道徳の根源、国民教育の基本理念を明示した勅語。1890（明治23）年発布。「御真影（天皇の写真）」とともに天皇制教育の支柱となり、国の祝祭日には朗読が義務づけられた。